

広井良典さん

(千葉大学教授)

コミュニティの未来に何が見えるか

人が生きる上で、さまざまななかかわりを持つコミュニティ。いま家庭や学校、職場、地域で課題となっている問題の背後で、日本人のコミュニティ観が問われているのではなか。『コミュニティを問いなおす』(ちくま新書)を刊行した広井さんに聞いた。

ソトとの交流に乏しい日本社会

——「コミュニティ」の問題は、今日的な社会課題としてさまざまな関心が集まっていますが、今回の本で問題とされたことは？

「コミュニティ」に対応する日本語は「共同体」になると思いますが、どちらの言葉も、人によって受け止めるイメージにかなり違いがあるのではないでしょうか。とくに「共同体」という言葉にはマイナスの印象を持つ人が多い。それは閉鎖的で個人を抑圧するもの

であり、ある種の封建的な遺物であって、乗り越えていくべきものである——と、そういう議論が続けられてきました。

今回の私の本で「コミュニティ」という言葉を使っているのは、単純な言い方をすれば共同体をめぐるこれまでの議論を見直しつつ、これからの未来のコミュニティを、どう作っていけるかを問題にしようとしたからです。

戦後の日本社会とは、一言でいえば、日本人が農村から都市に大移動してきた時代であったといえます。かつての「農村型ムラ社会」がなくなったのかといえ

ば、そうではなく、都市の中に新たなムラ社会が組み込まれた時代だったともいえます。

都市の中でムラに代わって出現したのが「カイシャ(公社)」であり、「核」家族のつながりでした。

閉鎖性の強いコミュニティとしての「家族」が共同体の単位となり、カイシャが、その家族の福利厚生からマイホームまでの面倒を見ていった。そして、ある



●ひろい・よしのり 一九六一年岡山県生まれ。東京大学大学院修士課程修了後、厚生省勤務を経て二〇〇三年より千葉大学法経学部教授。社会福祉や環境、医療に関する政策研究から、時間、ケアなどをめぐる哲学的考察まで幅広い活動続ける。著書に『定常型社会』『持続可能な福祉社会』『死生観を問いなおす』『生命の政治学』『ケア学』『グローバル定常型社会』など多数がある。

時期まで、それが比較的好循環に作用していきました。経済的な全体のパイが大きくなるのと同時に、個人の受け取る分も拡大していく流れの中で、うまくいっていた。それが戦後の高度経済成長時代を支えてきたともいえます。

ところが現在は——これは私が提唱する「定常型社会」(経済成長を絶対的な目標としなくても十分な「豊かさ」が実現されていく社会)とも関係してくるのですが——経済がどこまでも拡大成長していくことが望めない時代となり、経済の拡大成長に支えられてきたカイシャや家族を単位とする「都市の中のムラ社会」にも、好循環の前提が崩れつつあるのです。同時に深刻な疲弊が一気に現れてきているともいえます。

ここに私が深刻に受け止めているひとつの調査結果があります。それは、先進諸国で暮らす人々の「社会的孤立の状況」に関する「世界価値観調査」という調査結果(二〇〇〇年)で、日本は国際的に見てもっとも「社会的孤立」度の高い国であるとされています。

ここでの「社会的孤立」とは、家族や会社の同僚以外の人との交流がどのくらいあるかというもので、日本社会は、自分の帰属する共同体ないし集団の「ソ